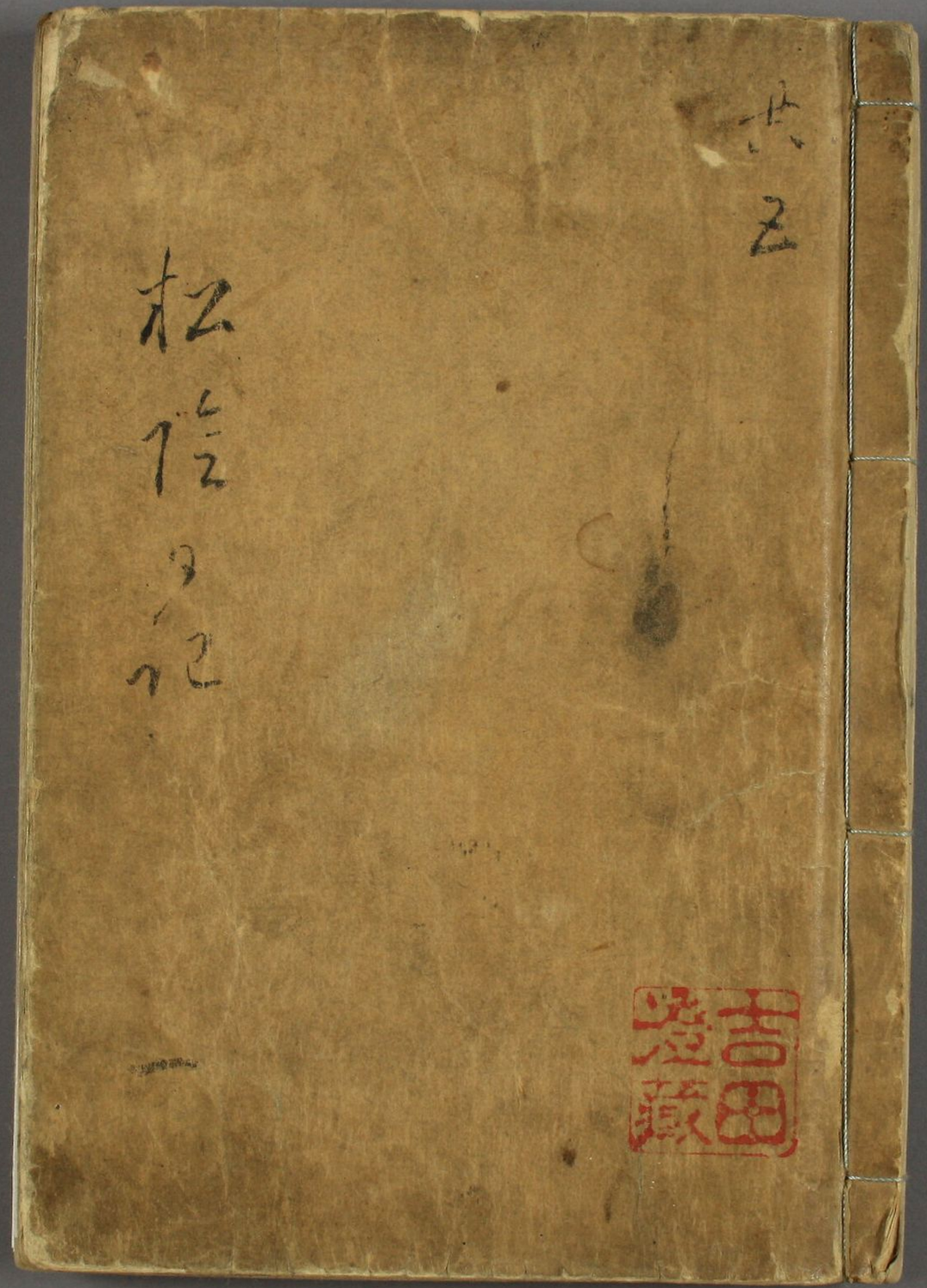

松陰日記巻第一

目録

第一　むさし野
第二　さひこうを
第三　かなかし世々
第四　所法の　海さと

九曜文庫

第五　年より代表

第六　常しへ乃人也

一むかし聖

ふの國人乃代とかりくよりこれ見しおもを
うりふむくしけふてちて何ありうらぬ此ゆ彼ゆ
をし同家かきの何人ゆ見る詩せんこゝ多くかほり
きなそもまゝ中に古ゆは延喜天暦の治せる
御世とそ志しかたけすゑかしこき毎めしまは
いふめもとそれをこの何元何る人の時をしらむ
何るはを何國にハおもをかき事乃ちれ
ゆるきなくしてこゝくに御さくしを何
さりけれどまへて今の時にせん御さりける

なりけるをもしいまの世乃ちし先河川
まちや久しき此河のとりにてしれなん
神の御事しとやそのれを下志此き
上をしられて此国河ましつりまをとのゝ志
事をこゝろひつゝせめ河をひぬまも世の
中ゝ志川ゝ多る月日なく河りふるまゝに
かけまくをかしこれまゝかほん神の多けき
御心をかうしたしけるゝ御の見我のこゝろかけ
見くゝ御をわかりしこれ我せいし
君ぬうやまひ民をやすんしかひしかも

一しひ小しく天ゝ下此法度こゝろくゝる
なひきつゝ御つりて此百と分河まりよ川の
海波の音ゆくれ百の川水かわきなりれも
小くる御の乃見我ゝ川よして国を事を
世をふし家ハ久し紀をさけうけうちて
よ川の民かれく所をえより世をしまりて
御るをもしき時なんまさなれハこゝろなき
芳木まちをむさし此乃知つお御恵を布し
此手此をうく河つきをしぬりもなんなりける
かしまはその御をしく世のかゝめとして

富士

新羅三郎義光の郎臣とやいますかりけり
甲斐なる御しまふてその御子むまこなと
かの國にこうしけれたうれを甲斐源氏
とそいふそれ義光のきこより六代をへて
今の君にはさきさきなるそれかこ世にこれ
時かくりてそのめひこの事さるゆ
きらの御国にまとと今御しなるかは女の
まひ出へきなるねえ男にはすこそ
ゆきるへき小のこも甲斐源氏の御を志
まて御一そうのうちなりけれて口にて

むきましく御しかえしてすませ申さて
君は貞享二年十二月十日かりかりまふ
出ねると申さされこの御をいとかわやす
事にはく申しめしてよ御見かりまち
此御所くすくいまふ年月後て貞享
四年になりぬその秋御父きこ此あく
まつしひのふまにけれ御ありまして御
のおとまやいつとなくなりかりしやまふ
此と為ありしきれし君いかにせんと御
御とふ御所にそ申し召御をもの御国師

典藥頭御くすり御事なふくれと御んな
いまて御目世事あまはかなくまいり
御しひく御事しきつんをのうに御さうか
御ん化のさまやきなふ屋うにとあらす御
御のよいかなんとしひさいく事御ふん
あしたれし御御しひハ日ともに氣りていふくと
ん申とたかくを此のくるせなふ御ゆるを御前の
御まへ乃ゆ御しし三ゐなしせかひし時
前の御前よりお目せるすかりて御ゆるを
御きさいはかうまつらなかひしに御ふしと

御目しきまれ寸かけたうまれ御文
つ君まてさへとうし御せそんとに御目しきれ
成 負
なり御しの侍従まひく御ゆるうけなりて
氣りなふ御なやきなかとさんへとかしひまと
ましますやうして皆のうち御ゆよりハ
乃しやうれる夕へつゝ例の成貞の君
まいりなふて御ゆるに御しくなまれと
御ぬしうりまとこ面やうなりいるしの
御うへなかとゆふ御とふ今ハかゝる御なせ
まつきまても御身の御ゆるんハいうしうと

んかりしかは月せん此こゝろよりそよかはすへて
国とりにかへて努めしかくてそのとの平乃
十二月に国信に分り久しきなりもしくいと
然てこの国の事にてあ先は

二　多ひこゝろと

元録四年此春こゝろ御所のかゝし
まさへき所事の国給ひて世給ふ二月法ん
しらせ給ふ事しとゝ給ふと法まくに

然しくて所くさりえいてあふをしさし
給ふすれあります所いまゝ思ひ事ぬ人分し
後こゝ法こゝきいとゝ所にかゝるひ世事
給ふまゝ給くて月日をゝとて ゆしこ
ゝとし是元録元年とせいふいよく此事
多くこゝ法ゝ中間らせ給ふまゝにそのみ
給くまゝ世給ひぬ事江とゝふ所ゝりし
所ゝ間ゝ給ひ世給ふ又のとし此春は
対史に四まへに先しまゝ此法馬此事
くゝをゝせて給ひ事ふまへこゝ世中此めん

五　ちゝ　の書

太郎君の記とつ所にて此眼君御ゑ
いはちゝさうをいはるゝ自ひ為やまうら
をいはるゝ此あとも相をとしうあるす
御ゑ三郎なりあるゝ君もこのゝ御
ゑうかくてかくれ給へ出ゑ又いふくと
此んまとひとも御ゑへしいと此うし
りしと何まるやなし此んとおかれ
此といふくゑひてをそうぬ時ゑ

さやうのうたにいむるなとしていふく
ようと今ふも御ゑふそる事なれいのう
ともあらまれ　りれとおかすに相此なやゝ
乃をうたゝ御ハ志りかれしよりそよりう
めと母君なともまゝめ申すりあまとた
さうきゑうりあまふそなり給ふさいへと
此とおしう母君ゑかれて春光寺此河内
上人誓仲と此へし　母子なるなるせあれて
いむとうけさせあふいと此なれぬ此君
かと御年　させあふりけるゝ衣ふ為ゑしう

けふこのしきなるとかかりのかしこまりて
より御屏風をかゝる寿老人書こゝれハ
詩をそへくりて書給へる

南極精英寿老人　欣然相過太平辰
天公為鼓唯君德　来進遐齡千萬春

今見と何の御屏風にハ雪を毎給せたる
御前にはいかりけめとなりて仲丞もし
けんはくりぬけともなきまへる太郎君
よりめてしこれつくりを此酒さうか

そひたり小れなるよりとうしてまれなる
何ゝ君を心のまゝれたひていそうれたるや
子代の神を又うらくしまるめき歩
なるへきかてふる何ゝ見と何ゝは君和今
見と何ゝまた君作深させてうるうる給
御前二そそひたり
君和の花咲きをかそへよ君ゝよりひのちよ後ゝ
こゝろけの姫のまゝにも子代とこそて老をぬるや
君をかさねんそのかれかゝしくよりとまんの
さ田しとめつりけり御所よりも

六少しれ

東叡山にまゐりしまゐ頃宮は公辨親王とて
少也今れ世に是いとかりてたをいふ
君なりしなるにふをといとよ紀所中にて
行ゐるにようぼうしくもてなしまゐせ
給ふなり　六月五日所にしたをうし
まさせ給ふこその夏もけらる物なへ
ゐしかとなるへにはれえあらせかしき
事をしおくをうしまゐえにり
所なしなるの云ふにしまんの事

まひりてまゐ所もみるまたる
後のうち我又こそうに花ことにつくは
まてるまんえいと所しきりみちより
この日れまゐつとかんて所使まれ給ふ
いまくまゐる物給ふつきよりまゐ
中させ給ふなるへし乙の時なりに
入る物なふ所侍にて陵平僧僧正兄弟
僧正なりしかんて僧尼所なるもあり
なへり　家れ侍なりとかほくまいまりいや
うなりしけるてさそそ聞んを